

記念講演会

世界詩としての能と俳句

詩人 文化功労者 日本芸術院会員

高橋 睦郎氏



詩人。1937年福岡県生まれ。福岡学芸大学（現福岡教育大学）国語国文学科卒業。在学中に第1詩集『ミノ・あたしの雄牛』を刊行。上京して多方面の芸術家との交遊をもつ。82年『王国の構造』（藤村記念歴程賞）、87年『兎の庭』（高見順賞）、93年『旅の絵』（現代詩花椿賞）、95年『姉の島——宗像神話による家族史の試み』（詩歌文学館賞）、2010年『永遠まで』（現代詩人賞）ほか多数の詩集を刊行。創作は多岐にわたり、88年句集『稽古飲食（けいこおんじき）』（読売文学賞）をはじめ多くの句集、歌集、また2014年評論『和音羅読——詩人が読むラテン文学』（鮎川信夫賞詩論集部門）ほか多数。舞台芸術作品として、1978年台本修辞『王女メディア』（グローバル国際交流基金山本健吉賞）、90年能台本『鷹井』、99年オペラ脚本『遠い帆』、2012年新作能台本『散尊（サムソン）』など多数。国内外で自作詩の朗読も行う。2000年に紫綬褒章受章、2012年に旭日小綬賞受賞。2017年に文化功労者ならびに日本芸術院会員に選出。

ヨーロッパの教養人に説明無しに理解される日本の伝統芸術が二つある。一つは俳句で、もう一つは能……。パリを拠点に国際的に活躍している韓国人画家の言葉だ。俳句はエズラ・パウンドを通して20世紀の世界詩を大きく変えた、といわれる。能は21世紀の世界演劇を変えうるか。変えうるとしたらどう変えうるのか。弱年このかた長くこの二つに関わってきた詩人の立場から、聴衆の皆さんとご一緒に考えてみたい。（講師）

高橋先生と青山学院とのご縁は、2012年8月に本学英米文学科主催の第10回国際ミルトン・シンポジウムの際、英詩人ジョン・ミルトンの劇詩『闘士サムソン』を新作能『散尊（サムソン）』に脚色していただき、国立能楽堂において上演するという企画を契機に生まれました。17世紀イギリス詩を、日本の能という舞台芸術に見事に昇華させ、国内外の研究者、一般観客から大好評を博しました。

2018年9月23日（日・秋分の日）11:00～12:30

総研ビル12階 大会議室

参加費：イーゴ券4枚（当日会場受付でもお求めいただけます）

問い合わせ先：青山学院校友会大学部会事務局内

電話：03-3409-8990

E-mail：aogaku.eibun.alumni2020@gmail.com



英米文学科同窓会懇親会

青学会館において創立20周年記念懇親会を開催します。

会員以外の方もぜひお越し下さい。

日時：2018年9月23日（日）15:30～ 会場：アイビーホール（旧青学会館） 会費：3,500円

希望者は同封のはがき（切手不要）で9月15日までに申し込み下さい。

なお9月18日以降のキャンセルは会費をいただきますのでご了承下さい。